

平成25年度国立天文台研究集会開催報告書

平成25年 8月27日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) いわむろ ふみひで		
		岩室 史英 		
	所属・職	京都大学大学院 理学研究科・准教授		
	電話	075-753-3891	E-mail	iwamuro@kusastro.kyoto-u.ac.jp
研究集会名	光学赤外線天文連絡会シンポジウム 「2020年代の光赤外天文学 - 将来計画の再構成」			
開催期間	2013年 8月 6日 ～ 2013年 8月 7日			
開催場所	国立天文台 三鷹キャンパス 解析研究棟 大セミナー室			
参加人数	101名			
研究集会の概要	光赤天連シンポジウムでは、これまでも度々将来計画をテーマに取り上げてきたが、昨年から新たに中規模計画までを網羅した議論が進み、またTMTやTAO計画の予算措置がなされるなど、いくつかの重要な進展がみられたことから、大規模計画だけでなく、中規模計画までを包含した、総合的な将来計画の再構築に取り掛かるべき好機である、との共通認識が得られた。 そこで、来る世代の基軸サイエンスを念頭に置いて、将来計画を議論することをテーマとしたシンポジウムとすることとし、その獲得目標は、2003-2005年に纏め上げられた計438頁の大作「2010年代の光赤外天文学：将来計画検討報告書」の10年目の改訂へ向け、具体的に動き出すこととした。この報告書は、当時想定された次世代の天文学に、光赤外分野の大型計画が蓋然性を伴って結び付けられた計画書となっており、地上望遠鏡とスペース望遠鏡の両方が必要であることを明瞭に示しているなどとして各方面で高い評価を受けている。 今回のシンポジウムの獲得目標は、我々が目指すサイエンスを軸にして、中規模計画までも取り込んだ形での総合的な将来計画を形作っていくことの共通認識をコミュニティ全体で得ること、そして、将来計画検討報告書の改訂に向けた具体的なアクションに取り掛かること、とした。 当シンポジウムは、「日本の光赤外分野の動向（4講演）」「サイエンスの長期展望（14講演）」「光赤外プロジェクトの進捗（14講演）」「将来計画検討書の改訂へむけて（議論）」の4つのセッションで構成され、ほぼ1日目の午前、午後、2日目の午前、午後がそれぞれのセッションに当てられた。プログラムや講演タイトルは光赤天連のホームページで参照可能である。目玉となった講演は、「2010年代の光赤外天文学：将来計画検討報告書」の編集に深く関わった家正則氏と千葉柊司氏に行って頂いた2つの基調講演、および2020年代のサイエンスとしての9件のレビュー講演、加えて、大・中規模のプロジェクト12件の講演であろう。そして、検討書改訂版の編集に関する様々な意見を集約する場として2時間の議論の時間が設けられ、活発な討議がなされた。			

研究集会の成果	今回のシンポジウムでの成果は、目標としていた(1)中規模計画までも取り込んだ形で総合的な将来計画を形作っていくことの共通認識をコミュニティ全体で得ること、そして(2) 将来計画検討報告書の改訂に向けた具体的なアクションに取り掛かること、のいずれもほぼ達成できたことであろう。 最後のセッションにおける議論では、<u>改訂版の編集体制やその方針に関して、広く推薦を募り5名程度の編集委員会を設ける(今回のシンポジウムの世話人がその準備委員会委員に就く)ことについて了承が得られたほか、分科会で集まるための予算措置を調査する、まとめていく段階で光赤天連シンポを含む複数回の議論の場を設ける、「大規模と中規模のつながり」的なものを全体のコンセプトとする、各 chapter の雛形を編集委員会側で設けることでコンセプト統一を図る、などといった具体的な議論がなされた。</u> また、章立てや内容に関して、TMTやSPICA、すばるといった大型基幹望遠鏡は別扱いにする、大規模と中規模との関係や、天文台と大学との関係についての節もあるべき、post TMT, post SPICA についてもキックオフ的に入れられないか、地上とスペースで分けなくても良いのではないかとといった意見や、各プロジェクトの実行体制をきちんと示すべき、ただし、今後10年の活動を自ら縛ることがないように注意する、光赤外の中だけで閉じずに天文・宇宙物理全体の中での役割が書けると良い、宇宙研のロードマップに対しもう少し高所から意見する、国際協力で日本が何を指して何を獲得するかが書けると良い、どのサイエンス目標に絞ると効果的かを考えることも大切、他分野の人に光赤外の将来計画を判りやすく示す1枚ものの絵がぜひ欲しい、などといった多数の意見が寄せられた。これらの議論の内容を、ぜひ新しい編集委員会において吟味し、2015年3月の発刊を目指して、より実のある将来計画検討報告書の改訂へと取り組んで頂きたいと考えている。 なお、今回は通例と異なり、岡山UMなどとの抱き合わせではなく、単独での開催となったが、例年並みかそれを上回る101名の参加があり、活発な議論がなされた。また若手の顔ぶれが多かったことも印象的であった。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	光学赤外線天文連絡会のホームページ http://www.ioa.s.u-tokyo.ac.jp/gopira/ (今回のシンポジウムのウェブ集録へのリンクがあります)